

平成 28 年度「地域人材の活用や学校等との連携 による訪問型家庭教育支援事業」成果報告書

和歌山県

1. 事業の題名

「 和歌山県の地域人材の活用や学校等の連携による訪問型家庭教育支援事業 」

2. 事業実施組織の構成

①組織の全体構成員

	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
1	奈良学園大学人間教育学部 教授	
2	橋本市立応其小学校 校長	
3	湯浅町教育委員会 副次長・指導主事	
4	和歌山県子ども・女性・障害者相談センター長	
5	ウィメンスタディズ熊野 代表・NPO熊野 副理事長	
6	和歌山県教育庁生涯学習局生涯学習課 副課長	

②事業推進担当者

	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
1	和歌山県教育庁生涯学習局生涯学習課地域教育班 社会教育主事	

3. 事業の実施内容及び実施方法等

①家庭訪問型支援チームの編成方法・学校・家庭と連携するための体制づくりについて

和歌山県では、全国的にみて、先進的に訪問型家庭教育支援を実施している湯浅町、既に取り組み始めている橋本市、今年度より取り組みを行う那智勝浦町の3つの地域において、それぞれ異なった地域の実態に応じて訪問型家庭教育支援が効果的に機能するよう、事業を実施した。具体的には、3つの市町に再委託をし、福祉部局と教育委員会が連携し、地域の実態に応じた、訪問型家庭教育支援を行うための支援員の体制づくりの構築を支援した。

【橋本市】専門的資格を有する者は支援チームに属さないが、定期的にはアドバイザーとして専門的資格を有するものを招聘している。乳幼児健診などを活用して情報提供・相談対応し、さらに要請があった家庭への訪問支援を行っている。これまでの家庭教育支援チームとしての活動にとどまらず、福祉部局等と連携することで、さらに広がりのある活動を行うことができた。

【湯浅町】SSWを中心とする家庭教育支援チームで、中学生までの子供を持つ全家庭への訪問支援を行っている。今までの体制を継続していくとともに、新たな支援員の人材養成や、さらなる資質の向上に努めて、活動を続けている。地域人材を生かした支援員の相談対応スキルをさらに高めることができた。

【那智勝浦町】学校が発信する不登校等の課題を抱えた子供に関する情報を各関係機関が共有できる体制の構築が整った。訪問型家庭教育支援チーム員には、元保育所長や小学校の支援員がおり、関係機関の連携を促進することができた。

②3つの支援チームの交流及び支援員の資質向上について

随時、相談・支援を行い、専門講座を年3回開催することで訪問支援員の資質の向上を図り、3市町の活動連携や情報提供を行う他、シンポジウムを開催し、3市町の実践を他の市町村に紹介する場を設けることで、将来的には全県的に訪問型家庭教育支援事業を推進できるよう啓発した。

【第1回 訪問型家庭教育支援事業 専門講座】

1. 日時 平成28年9月1日(木) 13時30分～16時
2. 場所 和歌山県自治会館
3. 参加者 橋本市家庭教育支援チーム「ヘスティア」 4名
橋本市教育委員会 2名
湯浅町家庭教育支援チーム「とらいあぐる」 8名
那智勝浦町教育委員会 1名
4. 内容
 - (1) 講演 「子どもの虐待防止について」
講師 和歌山子どもの虐待防止協会 副会長 家本 めぐみ 氏
 - (2) 交流会

【第2回 訪問型家庭教育支援事業 専門講座について】

1. 日時 平成28年10月26日(水) 13時30分～16時30分
2. 場所 和歌山県自治会館
3. 参加者 橋本市家庭教育支援チーム「ヘスティア」 4名
橋本市教育委員会 1名
湯浅町家庭教育支援チーム「とらいあんぐる」 7名
4. 内容
 - (1) 事業報告(橋本市、湯浅町、那智勝浦町)
 - (2) 講演 「訪問型家庭教育支援に必要なコミュニケーション力とは？」
～まずは「聞く・聴く・訊く」から～
講師 宇都宮大学地域連携教育研究センター 准教授 佐々木 英和 氏
 - (3) 交流会

【第3回 訪問型家庭教育支援事業 専門講座について】

1. 日時 平成28年12月12日(月) 13時～15時50分
2. 場所 和歌山県民文化会館
3. 参加者 橋本市家庭教育支援チーム「ヘスティア」 4名
橋本市教育委員会 1名
湯浅町家庭教育支援チーム「とらいあんぐる」 5名
那智勝浦町教育委員会 2名
那智勝浦町「ほっとほーむ」 3名
大阪府教育委員会 2名
4. 内容
 - (1) 講演 「切れ目のない支援と訪問型家庭支援について」
～学校教育と福祉行政の連携～
講師 奈良学園大学人間教育学部 善野 八千子 氏
 - (2) 交流会

【訪問型家庭教育支援事業 シンポジウム】

1. 日時 平成29年1月16日(月) 10時30分～15時30分
2. 場所 紀南文化会館
3. 参加者 行政関係者(教育 16名、福祉 18名)
家庭教育支援チーム員 12名
家庭教育講座受講者 13名
その他 2名(新聞社、小学校教頭)
4. 内容
 - (1) 行政説明「家庭教育支援の推進について」
講師 文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課家庭教育支援室
室長 関 百合子 氏
 - (2) 講演 「誰にでも起こりうる不登校」
～未然に防ぐために私たちができること～

講師 一般社団法人家庭教育支援センターペアレンツキャンプ

代表 水野 達朗 氏

(3) 実践発表

①「ほっとほーむの第一歩」

発表者：那智勝浦町教育委員会 学校教育課長 草下 博昭 氏

②「有田市の家庭教育 ～コウザ×カフェ＝ツナグ～」

発表者：有田市教育委員会生涯学習課 社会教育主事 櫻村 肇 氏

(4) パネルディスカッション

「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉 切れ目のない支援のために」

コーディネーター：奈良学園大学人間教育学部 教授 善野 八千子 氏

パネラー：橋本市立応其小学校 校長 今田 実 氏

新宮市社会福祉協議会 地域福祉部長 奥田 修子 氏

湯浅町教育委員会 副次長・指導主事 川口 厚之 氏

文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課家庭教育支援室
室長 関 百合子 氏

4. 事業の実施により得られた成果・効果

①家庭訪問型支援チームの編成方法・学校・家庭と連携するための体制づくりについて

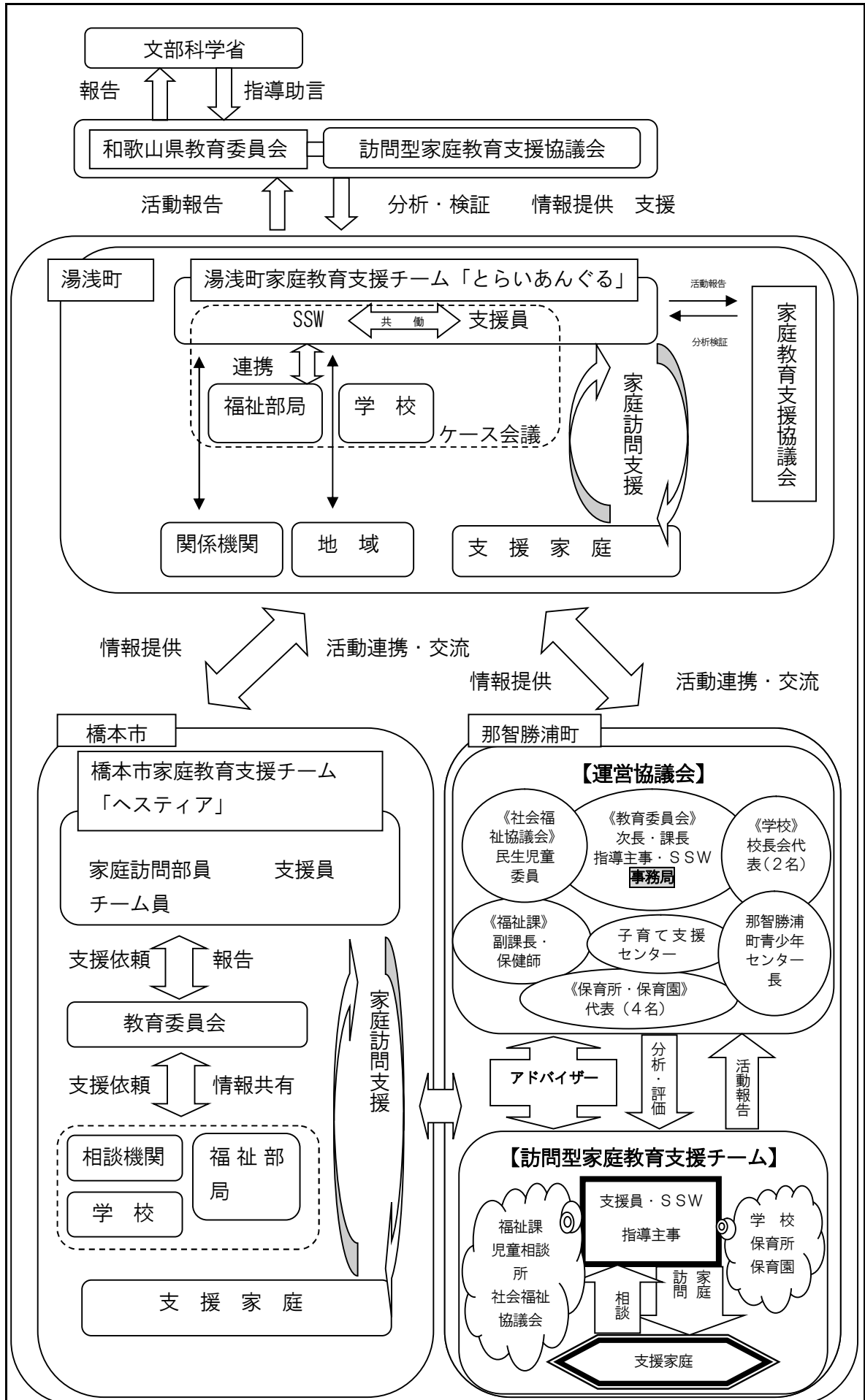
3つの市町に再委託し、湯浅町は全家庭への訪問型家庭教育支援、橋本市は乳幼児健診などでの相談対応及び福祉部局や教育委員会から要請のあった家庭への訪問型家庭教育支援、那智勝浦町は、支援の必要な家庭への訪問及び年齢層を絞っての訪問型家庭教育支援と、それぞれの地域の実態に応じた訪問型家庭教育支援を展開することができた。

各市町においては、福祉部局や学校等、他の機関と連携しながら子育て支援、家庭教育支援ができるよう、訪問体制の整え方について検証し、効果的な体制づくりを整えていくことができた。それに伴い、未就学児から義務教育機関にかけての継続的な家庭教育支援体制の基盤構築ができるとともに、関係機関の連携・協働が促進されることによる家庭教育の充実を図ることができた。

②3つの支援チームの交流及び支援員の資質向上について

各市町単位での家庭訪問支援員の研修を重ねたことで、人材の資質向上を図ることができた。また、和歌山県主催の専門講座やシンポジウムにより、より専門的な訪問支援員の資質向上を図ることができた。また、専門講座やシンポジウムで、3つの市町が互いに課題を出し合い、交流を設けることで、どのような専門的知見やスキルが訪問支援に効果があるか、分析・整理し、より良い体制づくりを具体性のあるものにすることができた。さらに、シンポジウムにおいては、3つの市町以外の市町に対しても、広く訪問型家庭教育支援事業について周知することができた。

5. 事業の実施体制



6. 事業実施スケジュール

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
		月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
和歌山県	運営	協議会			協議会			協議会			協議会		
	専門講座				専門講座			専門講座					
	シンポジウム											シンポジウム	
湯浅町	協議会	事業内容の詳細について協議及び調整（随時）											
	家庭訪問	家庭訪問（随時）											
	研修	ケース会議・研修（随時）											
橋本市	家庭訪問	家庭訪問（1家庭 月2～3回）											
	研修	ケース会議・研修（3回）											
那智勝浦	チーム編成	支援員選定・交渉			支援チーム結成								
	家庭訪問	家庭訪問（随時）											
	研修	ミーティング・研修（月1回×10回）											

7. 事業の評価にかかる項目（事業実施前後のアンケートの実施等による事業全体の評価体制、評価手法、評価の結果）

和歌山県教育委員会、福祉部局、専門家で訪問型家庭教育支援協議会を構成し、本事業内容の詳細について協議するとともに、和歌山県教育委員会開催の事業内容について、詳細に分析・評価・検証を行った。

○協議会、専門講座、シンポジウムについて

【評価項目、委員のコメント】

- ・ 回数は適切であったか。
→次年度も求められる回数であると思われる。
- ・ 時期は適切であったか。
→7月から2月まで配分され、適切であった。
- ・ 内容は支援員のスキルアップに繋がっていたか。
→県内の取組のボトムアップとなった。訪問型家庭教育支援手法の開発・普及の拡大に繋がった。
専門講座において、支援員同士の交流が図られたことが、自信に繋がっていった。
実践発表が支援員の学びに繋がり、励みになっていた。